様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０５４２

研究課題名（和文）宮沢賢治の言葉と文体―近代の地方における「標準語」の受容の実態―

研究課題名（英文）Usage and Writing Style of Kenji MIyazawa:The Acceptance of Standard Japanese in Tohoku Region during the Early Modern Era

研究代表者
小島　聡子（Kojima, Satoko）

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：７０３０６２４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：宮沢賢治の語法について、童話作品を中心に考察した。分析にあたって、宮沢賢治と、比較対象として浜田広介・佐々木喜善の作品を基にコーパスを作成した。
　その結果、宮沢賢治の作品には、標準語の中に方言の語法の影響とみられる語法がみられることを指摘した。
　また、宮沢賢治の童話の文体は、副詞の用法などから話し言葉的な性格が強いことを指摘した。これは子供向けの作品として平易な文体を目指し、硬質な書き言葉を避けようとしたためであると考えられる。また、地の文などに方言の影響が出るのも、話し言葉的であることが作用した結果であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The mainly outputs of this reserch project are as follows;
We made the corpus on writings of Kenji Miyazawa, Hirosuke Hamada and Kizen Sasaki,and analyzed them.
We pointed out that dialect interference is observed for usage of the standard Japanese of the works by Kenji Miyazawa. Also We showed that the stylistic value of Kenji Miyazawa is highly colloquial.

研究分野：日本語史

キーワード：近代語　宮沢賢治　口語体　方言　標準語　浜田広介

1．研究開始当初の背景

（1）書き言葉の口語文体の確立

現代の我々が用いている口語体の書き言葉は、明治期から大正期にかけてのいわゆる「言文一致運動」などの試行錯誤の末に新しい文体として作り出されてきたものを基盤としている。

この新しい文体成立の経緯については、従来詳細な研究があるが、多くは口語文体の成立に向けた動きについての分析が中心で、その後の明治後期から大正期にかけて、口語文体が確立・普及していく過程については、まだ分析が行き届かない部分もある。この時期の語法は、現代と同じものとみなされがちだが、実際には揺れも大きく、まだ分析・検討の余地が残されていると考える。

その中で、近年、電子媒体の普及とともに明治・大正期の文献資料の分析が進められるようになった結果、この時期の口語文体のゆれや、それが安定・収束に向かう過程の詳細が少しずつ明らかにされつつある。

（2）「標準語」の普及～方言との関わり～

書き言葉の口語体成立と並行して、いわゆる「標準語」が策定された。「口語体」と「標準語」はいわば表裏の関係である。

「標準語」は東京語を基盤としているといわれる。しかし、地方出身者にとって東京語は母語ではないため、「標準語」にはなじみが薄く、教育の場などを通して習得しなければならないもので、使いにくかった可能性が高い。「標準語」とほぼ同じと考えられる口語文体にも同様のことがいえる。

（3）宮沢賢治について

本研究で取り上げる宮沢賢治の生きた時代は、口語文体や「標準語」が普及する時期に重なる。しかも、宮沢賢治は、東北地方出身で、東京での短期滞在(最長で 7 ヶ月)以外に東京語との接触が非常に少ない。一方で、「標準語」の地方への普及に寄与したといわれる「国定読本」による教育を受けた第一世代でもある。

従って、宮沢賢治の作品の言葉遣いからは口語体や標準語の普及の様相を表すものと考えることができる。

2．研究の目的

宮沢賢治の言葉遣いは、現代から見ると少々変わっている。それは 100 年近く昔の作品だからというわけではなく、同じ時代の言葉の中においても特異なところが少なくない。これには、当時、口語体あるいは「標準語」そのものがまだ確立の途上で、ゆれの大きいものであったこと、さらに宮沢賢治自身の母語が方言であったことなどが関係していると考えられる。

本研究では、宮沢賢治について、童話作品を中心に言葉遣いを分析し、その語法・文体の特徴を明らかにしようとする。特に、生涯のほとんどを地方（岩手県）で過ごした宮沢賢治が、どのような口語文体を書いていたかに着目し、「標準語」のつもりで書かれていると思われる部分に見られる方言の影響を詳細に検討する。

それによって、中央で作られた「標準語」が地方でどのように受け入れられ、あるいはどのように変容していったかについて、その一端をみようとするものである。

3．研究の方法

（1）コーパスの作成

宮沢賢治の作品とともに、比較対象として浜田広介と佐々木喜善の作品を取り上げる。

それぞれ原文を電子化したテキストを作成する。それをもとに文字列検索に対応した簡易なコーパスを作成する。さらにテキストに形態素解析を施した上で、タグ付きコーパスを作成する。

① 宮沢賢治の作品

宮沢賢治については、『注文の多い料理店』の既存のテキストデータを利用し、コーパスとして使用できるよう加工する。

② 浜田広介の作品

浜田広介は、宮沢賢治の 3 歳年長でほぼ同時代の童話作家であり、東北地方(山形県)出身という共通点がある。一方、標準語との関わりから見ると、浜田広介は大学からは東京で生活をした点で異なる。そのため、東京語との接触の度合いが与える影響を見るのに最適な作家の一人と考える。

浜田広介については『椋鳥の夢』の初版(復刻)を電子化した。

③ 佐々木喜善の作品

佐々木喜善は宮沢賢治の 10 歳年長で少し世代は異なり、童話作品もないものの、同じ岩手県のほぼ同じ方言圏の出身で、方言の影響を考えるのに適切である。

佐々木喜善については『東奥異聞』の初版を電子化する。

(2)データの分析

作成したデータを用い、当時の標準的な日本語として『太陽コーパス』等を利用しつつ、標準語と宮沢賢治の語法の違いを探索し、宮沢賢治の言葉遣いの特徴を明らかにする。

また、宮沢賢治に特徴的な語法については、各種の方言のデータと比較して、方言からの影響を探る。

4．研究成果

(1)宮沢賢治の作品にみられる方言

① 方言そのものの使い方について

宮沢賢治の作品では、方言がよく使われることが知られているが、その使い方を確認し、次のようなことを明らかにした。

宮沢賢治作品のうち、戯曲や童話に方言が使われる場合、当該の話者の発話のほぼ全体が方言で書かれることがほとんどである。植物など物の名称については、明らかに方言と

目される語形が、部分的に用いられるということもないわけではないが、それもごく一部で、基本的には方言と標準語は意図的に区別して用いようとしていることがうかがわれる。

また、宮沢賢治の作品に使われている方言について、従来、宮沢賢治の出身地・花巻の方言であることは自明のこととして等閑視されてきた。そこで、本研究では、当時の資料（宮沢賢治の死後直後にあたる昭和 15 年作成の花巻の方言を記録した『花巻町郷土教育資料』や、明治期に書かれた花巻方言についての論文資料など）に照らして、間違いなく当時の花巻の方言の特徴がみられることを確認した。

方言は宮沢賢治の作品中ではまとまった会話として現れるので、花巻方言の会話の例として貴重な資料となると考えられる。

② 標準語の中の方言からの影響

宮沢賢治は、方言と標準語を意図的に区別して用いていると思われるが、一方で、標準語として書かれていると思われる部分にも、標準語とは異なる語法が見られる場合が少なくない。そこには方言の影響が見られる場合がある。

本研究では、特に助詞について、その使い方の傾向が標準語とは異なる場合に、方言の影響があることを指摘した。

例えば、「花が好きだ」のような場合に「好き」な対象を示す際、標準語では助詞「が」が用いられる（対象語）が、宮沢賢治は「を」を用いる傾向が強いことを示した。

このことについては、宮沢賢治の母方言で助詞「が」が用いられないこと、「好きだ」もあまり用いられず、類似の表現で「～を好かない」という動詞の形が用いられることなどが関連していると考えられる。

次に、宮沢賢治の作品では「へ」という助詞の使用範囲が標準語よりも広く、そのため使用頻度も高くなっていることを示した。

このことは、東北方言において用いられる助詞「さ」の影響が現れたものと考えられる。

標準語の助詞「へ」は移動の行く先・方向などを示す際に用いられるが、あまり用法は広くない。同じような用法の助詞に「に」があり、「に」の方が、用法も広く頻度も高い。

一方、東北方言の助詞「さ」は行く先や方向以外にも用いられるが、そのほかに動作の目的等も含め、標準語では「に」を用いるような場合にも幅広く用いられている。

宮沢賢治の助詞「へ」の用法は、東北方言の助詞「さ」の用法と見れば違和感がない例ばかりであり、「さ」を「へ」に置き換えて用いた結果、「へ」の用法が標準語の場合より広く多くなったと考えられる。

さらに、終助詞「じゃ」の使い方についても特徴的な用法が見られることを指摘した。

「じゃ」は標準語というよりは、老人・博士の用いる指定辞として、役割語的な用いられ方をする。しかし、岩手の方言では、標準語の終助詞「ぞ」「ぜ」のような用法の終助詞として用いられている。

宮沢賢治の作品の中には、特定の人物が「じゃ」を使う例が見られる。「じゃ」を使う人物は、「大王」や、「大将」など老人や地位のある人物が殆どで、いわば役割語的に使われていると考えてよい。しかし、それらの「じゃ」には指定辞「じゃ」もあるが、指定辞「じゃ」では考えられないところに用いられている例があり、しかも一人の発話の中で混在している。

これは、宮沢賢治が、岩手方言の「じゃ」と指定辞の「じゃ」を混同しているためと考えられる。

（２）話し言葉的な言葉遣い

宮沢賢治の言葉遣いは、地の文を含めて、話し言葉的なところが多く見られ、そのことが、文体全体の特徴を形作っていると考えられる。

① 感動詞的な「もう」

宮沢賢治の作品では、他の浜田広介などと比較しても「もう」の頻度が非常に高い。

「もう」には、時間的な用法「もう帰る」、累加の用法「もう一回」、否定の強調の用法「もうしない」、単なる強調の用法「とにかくもうすごい」があるが、宮沢賢治の作品の例は、三分の一が単なる強調の用法である。単なる強調の用法の「もう」は、話し言葉としては感動詞的によく使われるが、書かれたものではあまり見られない。この感動詞的な「もう」が頻出することで宮沢賢治の作品は、個人的な語りをそのまま書いたような印象をもたらす。

②程度副詞の頻度と用法

「もう」は強調する語であるが、宮沢賢治の作品では、そのほかにも程度を強調する副詞の多く用いられている。浜田広介・佐々木喜善と比較しても、程度副詞のうちの程度を強調する語の種類が多く、程度強調する語全体の頻度も高いことが特徴として挙げられる。

また、個々の用法では、「とても」の使い方が特徴的である。、

「とても」は否定と呼応する陳述副詞だったものが大正期ごろにかけて程度副詞の用法を獲得してきたことが知られている。宮沢賢治の「とても」はこの時期としては新しい程度副詞の用法である。

宮沢賢治が上京して童話の構想を練っていた時期は、ちょうど「とても」の用法が変化しつつあった時期でもあり、そのことが新しい用法が用いられたことと関係する可能性も考えられる。

（３）文体の分析と指標

本研究で作成したタグ付きコーパスを使って、宮沢賢治・浜田広介・佐々木喜善の三

者の文体について、従来よく用いられている文体の指標などを確認した。
（ただし、佐々木喜善については、機械処理のみで未修正のデータで、誤解析を含む）
①ＭＶＲ
「MVR」は「形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の組の比率Ｍに100をかけたものを動詞の比率Ｖでわった値」で、つまり「相の類」（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）と「用の類」の比である。MVRが高いと「ありさま描写的」、低いと「動き描写的」とされる。
　宮沢賢治はMVRが67.79、浜田広介は51.19、佐々木喜善は42.30で、宮沢賢治の文が非常に「ありさま描写的」であることがわかる。特に、『注文の多い料理店』の「序」は、MVRが87.50と極端に高い。

②オノマトペ率
　宮沢賢治の作品はオノマトペが多いことが従来指摘されている。これについて、実際にデータで確認した。
　オノマトペの語数が自立語にしめる割合を調査したところ、宮沢賢治は4.31%であったが、浜田広介は 1.71%、佐々木喜善は0.26%で、宮沢賢治のオノマトペ使用率が高いことが確認できた。

③文の長さ
　タグ付きコーパスによって、語数や文数を調査することが可能になった。
　宮沢賢治の文章では、文が冗長であるという印象がつよい。そこで、文の長さを一文を構成する語数で調査してみた。その結果、宮沢賢治の文体の特徴がよく出ている『注文の多い料理店』の序では、一文あたりの語数が25.45 と非常に多く、一文が大変長いことがわかった。浜田広介『椋鳥の夢』の「自序」は16.38である。
　話し言葉では、一般的に文の切れ目が明確でなく、冗長になりがちである。文が長いということは、話し言葉的であるためとも考えられる。

（４）まとめと今後の課題
　宮沢賢治の言葉は、現代から見て特異なものを含むだけでなく、当時の日本語に照らしても、やや特異な表現が少なくない。それらには、方言の影響が出ているところがあるほか、書き言葉らしからぬ表現が少なくないことを指摘してきた。
　宮沢賢治が活躍したのは、口語体の書き言葉が作られつつあった時代である。しかし、そこで用いられた「口語」は、大勢に対する演説の言葉や、人情噺などの「語り」芸の言葉であったことは従来指摘されてきたとおりである。つまり「口語体」とはいうが、決して日常の個人的なお喋りの言葉ではない。
　しかし、宮沢賢治の書く「口語体」の童話は、どちらかというと日常的なお喋りの言葉遣いに近く、書き言葉らしくない。これは、子供向けの平易な書き言葉の口語体というのが未だ確立されていなかったためとも考えられる。
　しかも、宮沢賢治の場合、地方で暮らしていて方言環境にあるため、普段話しているように書こうとすると、方言が入り込む可能性が高まることが考えられる。
　つまり、宮沢賢治の言葉遣いに、方言の影響が見られることと、書き言葉らしからぬお喋り言葉的な語法が少なくないこととは、どちらも見宮沢賢治が「口語体」の書き言葉で書くことに不慣れで、話しているように書こうとしたことに起因するのではないかとも考えられるのである。
　しかし、方言の影響も話し言葉的な側面もさらに確認していくことが必要である。
　特に、データの整理は、まだ不十分な点もあるので、今後タグ付きデータをさらに整備するなどして、分析を進めていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）
① 小島聡子、「宮沢賢治の童話における程度副詞―程度の大きさを表す表現について―」、『近代語研究』第十八集、査読無、2015 年、pp..207-226

② 小島聡子、「宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響」、『国立国語研究所論集』5、査読有、2013 年、pp..27-41

③ 小島聡子、「花巻方言の資料としての宮沢賢治作品」、『賢治とイーハトーブの「豊穣学」』、査読無、2013 年、pp..161-188

④ 小島聡子、「宮沢賢治の童話における「標準語」の語法―方言からの影響について―」、『近代語研究』第十六集、査読無、2012 年、pp..331-347

〔学会発表〕（計　2　件）
① 小島聡子、「宮沢賢治と浜田広介の文体比較―話し言葉的側面の出方について―」、「通時コーパスの設計」研究打ち合わせ、2015 年 4 月 18 日、国立国語研究所(東京都立川市)

② 小島聡子、「近代の地方出身作家の助詞の用法について―宮沢賢治と浜田広介―」、「近代語コーパス設計のための文献言語研究」共同研究会発表会、2011 年 12 月 26 日、国立国語研究所(東京都立川市)

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　※詳細は未定だが、所属機関のホームページにてデータ公開予定。

６．研究組織
(1)研究代表者
　小島　聡子（KOJIMA,　Satoko）
　岩手大学・人文社会科学部・准教授
　研究者番号：70306249

(2)研究分担者
　(　　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
　(　　　)

　研究者番号：